イギリス短期留学を通じて

高校一年　M・I

出発まで

ある日、私宛に一通の手紙が届いた。

母に、

「ホストファミリーが決まったみたい。」

と言われ、私は手紙を受け取った。その時は定期テスト期間中だということも忘れ、

「私たちを受け入れてくれるホストファミリーはどんな家庭なのだろう」

という思いでドキドキしながら封を開いた。

まず目に入ったのはジョー、ホストマザーの名前であった。そして子供の欄を見てみると、アミリアと書いてある。十九歳らしい。自分より年上のお姉さんがホストファミリーであることに少し安心感があった。その時は、家は大きいのだろうか、ホストファミリーはどんな人なのだろう、休日はどこに連れて行ってもらえるのだろう、など海外に行くのが初めてだった私はイギリス短期留学へ行くことが楽しみで仕方がなかった。

しかし、出発が近づくにつれ不安が増していった。英語でコミュニケーションを取れるだろうか、見ず知らずのホストファミリーと二週間もうまくやっていけるだろうか、そもそも海外とはどのようなところなのか。生まれてからずっと日本で暮らして来た私にとって、語学研修へ行くことは楽しみな反面、不安が大きかった。

イギリスへの出発までの一週間は特に忙しかった。イギリスの事前学習、荷造り、日本料理の練習、買い物、宿題、など出発までにこなさなければならないことは山ほどあった。準備は母が手伝ってくれた。前日にはイギリスのガイドブックや英会話の本まで買って来てくれ、日常会話を話せるか不安であった私は少し安心して出発

することができた。

イギリス到着

飛行機では、友達と話したり、映画を見たりして快適に過ごしているうちに時間は過ぎ、気づけば着陸態勢に入っていた。不安が大きかった私であったが、その不安はイギリスの市街や農地を上空から見た途端に消え、これからの二週間、どのような経験が出来るのだろう、という期待に変わった。

飛行機を降りてからその日はホテルに直行したので、あまり英語に触れる機会はなく、まだイギリスに来た、という実感は湧かなかった。

ロンドン観光

二日目の朝、ホテルのバイキングで朝食をとると、ロンドン観光へ向かった。イギリスの料理は不味いと聞いていたが、思っていたより美味しかったので安心した。ロンドンはとても暑かった。そして綺麗な街だった。テレビでしか見たことがない洋風の建物が通りにびっしりと並んでおり、こんなに素敵な場所が本当に存在したのか、というのが正直な感想で、とても感動した。また、人口密度の高さに驚いた。

午前中は、ビッグベンやバッキンガム宮殿、衛兵交代式を見学し、ロンドンの街や歴史について学んだ。中でも、特に思い出に残っているのは、衛兵交代式だ。バッキンガム宮殿からまっすぐに走る大通りで衛兵交代式が始まるのを待ち、二十分経った末、ようやく音楽と共に衛兵が登場した。赤い制服を着た衛兵が皆、手足の動きをそろえて行進しており、とても見応えがあった。思っていたより観光客が多く、お祭りのような賑やかさだった。

お昼は中華料理を食べた。

「どうしてロンドンで中華料理を食べるのだろう？」

と不思議に思っていたが、ガイドさんが、

「イギリスではイギリス料理というよりは、中華料理やイタリア料理を食べることが多い。」
と言っていたので納得した。
午後は大英博物館へ行った。天井がとても高く今までに行ったどの博物館よりも広く感じられた。また、展示品の数が多いため、時間の関係で有名な展示品しか見ることが出来ず、残念だった。見学することのできた展示品の中で私が最も印象に残ったものはロゼッタストーンだ。理由は、ロゼッタストーンからはヨーロッパの人々の古代エジプトへの憧れとロマンが強く感じられたからだ。見学しきれなかった展示品を見るためにも、機会があったらまた訪問したいと思う。
その後、いよいよホストファミリーとの面会式に向け、チェルトナムへ出発した。イギリスは農地が多いため、同じような景色が続き、それを見ながら私たちを受け入れてくれるのはどんな家庭なのだろう、という緊張が続いた。バスで二時間ほど揺られると、綺麗な花があらゆるところに咲いており、落ち着いた雰囲気の場所であるチェルトナムに到着した。私たちが通う学校は二階建てで立派な校舎だった。
学校に入って少し歩いたところにあるホールに緊張しながら入ると、そこには沢山のホストファミリーが私たちを待ち受けていた。私とペアの子は後ろの方に座り、私たちを受け入れてくれるホストファミリーを探していた。開会式が始まり、先生の紹介や生徒代表の言葉を聞いたが、私はホストファミリーとの面会が待ち遠しくて仕方がなかった。私とペアの子はホストファミリーとの面会の順番が最後だったので次々と友達の名前が呼ばれ、ホストファミリーと面会するのを見守っていた。友達や迎えに来てくださったホストファミリーはどんどん帰っていき、ついに私たちの前の順番の友達が呼ばれ、私たちと私たちを受け入れてくれるホストマザーは目を合わせて笑った。ホストマザーのジョーが迎えに来てくれていた。彼女はとても優しい目をしているので安心した。背が高く、笑顔で私

たちに、
「お腹すいてない？」
と話しかけてくれたので、
「YES!」
と答えた。
「学校から家まで車でおよそ十分よ！」
とジョーは言った。車の中では自分から思うように話せなかったがジョーが話しかけてくれたので助かった。
家はとても可愛いコテージだった。家に入るとアミリアが挨拶をしに来てくれた。「Nice to meet you」と言って手を握ってくれた。十九歳とは思えないくらい大人びていて美人で驚いた。こんな優しい家族と二週間過ごせるなんて幸せだな、と感じた。
ジョーが家を案内してくれた。洗濯を入れる場所やお風呂の場所、私たちが二週間使う部屋まで丁寧に教えてくれた。そしてなにより私たちの部屋が可愛かった。私たちが使う部屋は屋根裏部屋で、壁が緑に塗られており、部屋の端には白いタンスが置かれ、白いベッドに黄色のドットの枕カバーとふとんが敷かれており、まさに私の理想の部屋だった。ここで二週間も過ごせるなんて幸せだな、と改めて思った。
夕食はピザとサラダだった。食事中に、日本とイギリスの文化の違いやロンドン観光について、また、ジョーとアミリアは野菜と魚は食べるが肉は食べないこと、お互いの好きな食べ物について話した。ジョーとアミリアが二人で話す時は会話のテンポが早くて聞き取れなかったが、私たちと話す時はゆっくり分かりやすく話してくれたので、聞き取りやすく、とても有意義な時間を過ごせた。

私のホームステイ生活

朝食は毎日ジョーと私とペアの子の三人で食べた。机の上にホワイトブレッドとブラウンブレッド、五種類ほどのジャムやチョコが置いてあり、自由にとって食べる、というシステムだった。また、

飲み物はジョーが、
「りんごジュースとオレンジジュースどちらがいい？」
と、毎日聞いてくれた。私とペアの子はホワイトブレッドが好きなので、毎日ホワイトブレッドを食べていたが、ジョーは、
「イギリス人はだいたいブラウンブレッドを食べるのよ。」
と言ってブラウンブレッドを食べていたので、食文化の違いを感じた。
食事が終わった後には、ジョーはいつも、
「おかわりはどうかしら？」と私たちが空腹でないかを確認し、気を配ってくれた。朝食時にはラジオが流れており、二十分ほど食事をしながら三人で会話をし、支度をしてから学校に向かった。
朝礼が始まるまで友達とお互いのホストファミリーについて話した。みんな家族構成や生活スタイルが違っていて面白いなと思った。
午前は English class を受けた。初めは英語の授業についていけるか不安だったが、先生がゆっくり話してくれたり、グループで英語を使ったゲームをしたり、問題を解くときにはいつもティーチングアシスタントがそばにいてくれたので、思っていたより早く授業に慣れ、クラスのみんなが仲間に感じられた。
昼食はジョーが作ってくれたランチボックスを食べた。基本的にアルミホイルに包まれたサンドウィッチとスナック菓子、チョコバーに丸かじりりんご、そして、私の好きなオレンジジュースを入れてくれた。スナック菓子は毎日違う物を入れてくれたので飽きずに食べることができ、いつもランチボックスを開けるのが楽しみだった。
午後はグロスター寺院やシェイクスピア劇場、コッツウォルズ散策など、イギリスの人気の観光スポットに行き、充実した時間を過ごすことができた。
帰りはほかのホストファミリーの二人とカーシェアをしたので、ジョーか、友達のホストファミリーのフローラが私たち四人を迎えに来てくれた。また、時には大学の帰りにアミリアが歩いて迎えに

来てくれることもあった。歩くと家まで一時間近くかかるのだが、アミリアと話しながら歩くと、時間があっという間に感じられた。

学校から帰るとジョーが必ずクッキーと紅茶を出してくれた。そして、その日の学校の出来事や楽しかったことなど、私たちの話を聴いてくれた。

夕食はイタリア料理が多かった。イギリスの料理が口に合うかを心配していたが、ジョーが作る料理はいつも美味しかった。Fish and chips など、有名なイギリス料理も食べることができて嬉しかった。そして、ご飯の後は必ずホットチョコを出してくれた。

夜は毎日ホストファミリーと過ごした。スーパーマーケットに行ったり、ジョーとアミリアと私たち四人で映画を見たり、カードゲームをしたり、タレントショーの練習をしたりと、毎晩、私たちに良い思い出を作ろうとジョーが考えてくれた。特に私が心に残っているのは映画鑑賞だ。なぜならジョーが、私たちがあまり英語を聞き取れないことを考慮して、英語を聞き取れなくても楽しめる映画を選んでくれていたからだ。時には、ジョーのテニス仲間の交流会に連れて行ってくれる日もあった。彼らの雰囲気は温かくて優しくて、話している英語はあまり聞き取れなかったが楽しかった。こんなにも私たちが英語に触れる機会を作ってくれる優しいホストファミリーに巡り会えて私は幸せ者だと思った。

ホストファミリーと過ごした休日

前日の夜に、

「明日は好きな時間に起きていいわよ。」

とジョーに言われたので、八月四日土曜日は午前九時に起きて、十時にチェルトナム の街に出かけた。ショッピング街まではジョーが連れて行ってくれて、そこからは私とペアの子に自由行動の時間を二時間くれた。私たちの要望を聞き入れてショッピング街に連れてきてもらえたことが嬉しかった。チェルトナムのショッピング街は

日本でいうアウトレットのような野外施設だ。PRIMARKや雑貨店、紅茶の店などがあり、お土産を選ぶのには十分だった。二時間経ってジョーと再会すると、彼女は新しいサンダルを履いていた。私はてっきり彼女は一度家に帰ってまた迎えに来てくれたのだと思っていたので驚き、

「あなたはこの二時間何をしていたの？」

と聞いた。するとジョーは

「喫茶店で雑誌を読んだ後、山登りをするための新しい靴を買って、あなたたちを待っていたのよ。」

と言った。ジョーは私たちが買い物をしやすいよう別行動をさせてくれていたということを知り、彼女の優しさに改めて感謝した。

八月五日、午前九時に起きると、家の中が静かだった。ジョーは朝から出かけると聞いていたので、

「せっかくの休日なのに一日中家で過ごすのだろうか」

と残念に思っていた。すると、一時間後にアミリアが起きてきて、私たちにパンケーキを作ってくれた。イギリスのパンケーキは薄くて大きいらしい。朝食をとっている最中、アミリアに

「どこか行きたいところはある？」

と聞かれたので、

「チェルトナムの散策をしたい！」

と言うと、彼女は、

「それなら山登りに行こう！」

と言った。正直私は、

「山登りは嫌だな」

と思ったが、

「頂上に立った時どんな景色が見られるのだろう、きっと綺麗なのだろうな」

と思い、その気持ちを励みに頑張った。頂上からの景色は最高だった。アミリアがグロスター寺院やホストファミリーの家の場所など、

チェルトナムの街について教えてくれた。そして私がその日、目標にしていた「ホストファミリーにフォトコンテストの写真を撮ってもらう」ことを達成することができた。

「一緒に写真を撮ってほしい！」

となかなか言えず、何度も頭でシミュレーションをし、勇気を出して言って良かったと思った。アミリアがコンテストの写真の案を楽しそうに一緒に考えてくれて嬉しかった。彼女が私たちのために片道一時間かけて山の頂上まで連れてきてくれたことや、つたない英語を話す私たちにいつも話しかけてくれて笑っている姿を見ると、「本当にこの家族に出会えて良かったな」と思った。

三時半に遅めの昼食を食べていると、ようやくジョーが帰ってきた。そして、彼女に、

「これから長いドライブにいくわ！」

と言われた私たちは、どこに行くのか、何の目的で行くのかを知らずに車に乗った。高速道路に乗り、自然豊かな田舎を通り、車に乗ること二時間半、ようやく目的地に着いた。ドライブをした目的はアミリアが中古の車を買うのでそれの下見に来たようだった。私とペアの子は、ジョーとアミリアが車の持ち主と話すため一時間待ち、話し合いが終わり次第、このまま帰ると思っていた。しかし、その後車で十五分経つと、なんとそこには綺麗な海が広がっていた。人がたくさんいて、そこはまるでディズニーリゾートのような雰囲気だった。本当に幸せだな、と思った瞬間であった。写真を撮って話をしながら fish and chips を食べた。

車で帰る途中、私はイギリスに来てから今日までの時間、自分自身に起こった変化があるかを考えた。その結果、ある一つのことが浮かんだ。それは、英語に対する考え方が変わったということだ。私は英語に苦手意識を持っていた。しかし、イギリスに来てから、英語は語学なのだから深く考えず、毎日聞く、音読する、というトレーニングを重ねることによってできるようになる、と今までとは少し違う考え方で捉えることができるようになっていた。

夜十一時に帰宅し、シャワーを浴びてベッドに入った。とても充実した休日を過ごせた。

市長訪問

八月七日、生徒代表の十人で市長訪問へ向かった。市長の職責の重さや、チェルトナムについてお話いただいた後、生徒からの質問にも丁寧にご回答いただき、市長室では、市長が身につける八万ポンド相当のゴールドチェーンを市長自らかけていただく忘れ難い経験をさせていただいた。

私は普段から積極的に代表として行動することがあまりないが、今回の市長訪問でこれから一生体験できないであろう貴重な経験をすることができたので、この市長訪問に参加できて良かったと心から思った。

さよならパーティー

私とペアの子の家庭は、友達のホストファミリーの家庭と組んでタレントショーに出ることが決まった。私のホストファミリーはすごくタレントショーに出たがっており、曲選びなどを協力してくれたが、二つの家庭のホストファミリー同士で意見が食い違うことがあり、さらに私達には言語という大きな壁があったため、両家庭の満足のいくステージを作り上げるのに苦労した。しかし、私とペアの子は振り付けを考え、別のペアの友達二人が曲編集をする、という役割を決め、なんとか舞台を作り上げることができたので、やりがいを感じると共に良い思い出となった。

さよならパーティーでは、私のクラスをティーチングアシスタントとして担当してくれた日本語を勉強中の女性と日本語で話す機会があった。私は日本語が話せることは聞いていたが、こんなにも日常会話が上手だとは思ってもいなかったので驚いた。二週間の間、イギリス人と英語で話していたので、日本語だとやはり肩に力を入れずに安心して話すことができた。彼女も夢に向かって日本語の勉

強を頑張っているのだから、自分も英語の勉強をもっと頑張ろうと思った。

ホストファミリーとの別れ

別れの日の朝は、アミリアとジョーとペアの子の四人で朝食をとった。二週間の思い出話をし、私たちの英語力を上げるためにはイギリスのラジオを聴くとよいと教えてくれた。

ジョーが学校まで送ってくれた。別れ際、

「あなた達と過ごせて本当に楽しかった！　別れるのは寂しいけど、次イギリスに来る時はうちに来て泊まってね！」

と言ってお別れのプレゼントをくれた。最後まで優しいジョーに心から感謝をした。しかし、私の英会話力が足りておらず、心の中はジョーとアミリアへのお礼の言葉でいっぱいだったが、

「Thank you!　I hope to see you again!」

としか言うことができなかった。

何で二週間ホームステイ先として受け入れてくれたことへの感謝の気持ちを伝えられなかったのだろう、と後悔した。文法が間違っていても単語を並べて感謝を伝えれば良かったと今でも本当に後悔している。次にイギリスに行く時は必ずジョーとアミリアに会って感謝の気持ちを伝えたい。その時はもっと日本の文化について自分自身で学び、伝えきれなかったことを伝えようと思う。

イギリス短期留学を通じて

私はこのイギリス短期留学で数え切れないほどたくさんの経験をし、たくさんのことを学んだ。

まず、自分の英語力がどれほど未熟なものかを知った。しかし、この短期留学を通じて英語は語学なのだから勉強すればするほど上達するものだ、と英語に対する考え方を改めることができた。将来のためにもこれからは英語の勉強に力を注ごうと思う。

そして、このイギリス短期留学が初めての海外経験だった私は、

今まで人種の違いには大きな壁がつきものなのかな、と勝手なイメージを抱いていたが、ジョーやアミリアという素敵な家族に出会って、彼らの優しさを知り、育った国が違っても心は通じ合えることを学んだ。

今回のイギリス短期留学で学んだことを生かして日々生活しようと思う。そしていつか必ずイギリスに行き、ジョーとアミリアに会って今回伝えきれなかった感謝の気持ちを伝えたい。